故名誉教授深瀬基寛先生を悼む

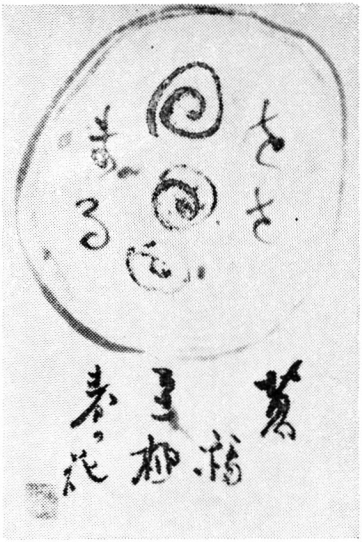
名誉教授深瀬基寛先生は昭和四十一年八月二十一日午後七時四〇分永い眠りにつかれた。永年の御不快、わけても、昭和三十七年三月以降の御重態を目撃してきたわれわれには、この日の訃報が必ずしも唐突のものでなかったかもしれない。しかしながら、先生が御病気を意にもかいせず御研鑽御執筆をつづけられ、御病気そのものも奇蹟的に克服されること数次に及んだ、その御気力をわれわれは知らされていただけに、そして、それゆえに、まだまだ先生の御在世を期待しまた信じていただけに、われわれの傷心衝撃は大きかった。名誉教授山本修二先生ともどもわが教室を支える二本の柱として、われわれ後進を御鞭撻御教示くださり、両先生あってこその京大英語教室であっただけに、突然先生を失ったわれわれ教室は大きな空洞をつくられたにも似た寂寥を感じ、また、それだけにいっそう、先生の存在の偉大さを痛感させられた。八月二十四日午後一時から執行された御葬儀告別式に、われわれは、衷心、先生の御厚恩を感謝し、先生の霊の静かに昇天するのをお祈りした。ここに、われわれを代表しわれわれの意思を体して捧げられた、教室の長老山村武雄教授の弔辞を再録することにより、また、併せて、先生の御略歴御業績を記録することによって、謹んで先生の霊を悼み、先生の生前の御鴻業をたたえるよすがとしたい。

（四十一年十二月、教室主任　山内邦臣記）

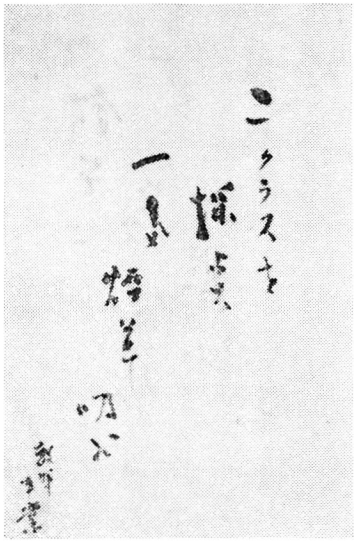
弔辞

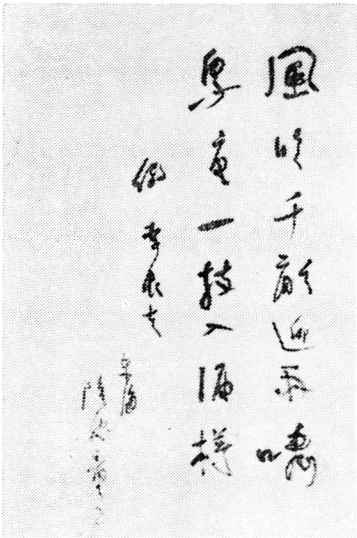
戦前の昭和のよき時代に、三高と共に歩まれた深瀬先生、戦後の沙漠のような時代に、英文学界において、京大の教壇において、一きわ巨きな、明るい星として、輝かれ、衆目の仰ぎ見るところであった深瀬先生は、普通人の到底くわだてることのできないほどの多くの御業績を、極めて精力的に、異常な熱意をもってあげられたお疲れもあってか、不幸にして病に倒れられ、長い闘病生活に入られましたが、強い意志力をもって病床において尚健筆を捨てられないでいましたが、夫人の手厚い御看護にも拘らず、去る二十一日、御逝去になりましたことは、われわれ、まことに痛恨の極みと存じます。

先生の学界における御業績は、余りに大きく、深く、多彩でありますので、到底わたくしなどの捕捉しがたいものがありますが、折にふれ感じましたことの一端を申し述べることをお許しねがいますと、いつか、先生は、京大英文学会の御講演で、先生独自の洒脱なユーモアを交えて「自分は英文学の学の字が嫌いだ。何とか、これは使いたくない」という意味のことを云って、聞くものを一時ハッとさせられたのち、ドライデンの「マックフレックノー」の "Shadwell never deviates into sense." の一行を引用され、この "deviates" 即ち逸脱、脱線ということは、自分の得意である、というようなことを云われました。これは停年講義を除いて、京大の講壇に立たれた先生をわたくしがうかがった最後のものであると思われますが、或意味で、これらの御言葉は、先生の文学研究に対する御態度がにじみ出たものでは



ないかと思われます。先生は、鋭い文学的感性をもって、特に、詩、文学批評、文明批評の分野において、重要な問題点を探り当てようと努力されました。そして、初期の業績の一つである、英米文学評伝叢書の中の「T・S・エリオット」のはしがきにおいて、「日本の文化と英文学の有機的な関係が現代ほど見失われた時代はない。特殊な研究にしても、一般的な問題をつねに意識した上でなされなければならないものと思う」と書かれているが、これは、その後、出版された書物になったものだけでも三十八点という汗牛充棟もただならぬものの中に、終始一貫した精神なのであります。学界において、極めて早い時期に、T・S・エリオット、ハーバート・リード、ジョン・ミドルトン・マリを紹介し、また、T・E・ヒュームにはじまる反人文主義の流れに着目して、ドーソンの三つの書物を翻訳、更に、トインビーの「試煉に立つ文明」、ウェイドレの「芸術の運命」、筑摩書房から出た「エリオット鑑賞名詩選」ときびすを接して出版された当時の盛観を想起いたしますとき、後者に与えられた昭和三十年度読売文学賞は、ただそれだけに与えられたものではないようにも思われます。





訳業は新しいイギリスの傾向をたずねてルイス、スペンダー、ホルロイドなどにも及びますが、また、まことに得がたき随筆の名手であられましたことは、先生のお人柄の流露したものであり、汲めどもつきぬ情趣をたたえて、いつまでも、先生と共にある感激をわれわれに残していってくださったことを感謝いたさないではおられ

ません。先生がわれわれ後輩のために、色々と御尽力くださったことは、改めて枚挙に遑はありません。唯一つ触れさせていただきたいのは、山本修二教授と京大教養部英語教室の基礎づくりに心を砕かれ、現在第十九集までに進展しております、機関誌「英文学評論」の表紙に先生の御手跡がかかげられていますが、われわれは誇りをもって、これを守りつづけることがせめてもの御恩返しかと存じています。

先生が、毎年の総合科学研究費申請のための教室会議において、極めて適切なアイデアを洩らされるとき、皆が先生を期待をこめて見守ったあの瞬間、宴の席で全く座に融け込んで腰を浮かせて歌われるあの瞬間、われわれの脳裡には、数々の到底消え去ることのない瞬間の先生があります。先生が京大御退官のとき出版された「童心集」には、先生の実によい御写真と御感想がのっていますが、この童心こそ先生の深い御体験とお人柄の綜合であり、それ自体が一つの芸術品であったと、今更なつかしくお偲びする次第であります。

在天の先生、安らかにお眠り下さい。

昭和四十一年八月二十四日

京都大学教授
山村武雄

（前掲の写真三葉は先生の遺墨集「沈子庵詠草」の一部である――編集委員記）

故名誉教授深瀬基寛先生略歴・著書目録

略　歴

明治二十八年十月十二日	高知県に生まれる
大正二年三月	高知県立第一中学校卒業
大正二年九月	第三高等学校文科入学
大正五年七月	同　卒業
大正五年九月	東京帝国大学文科大学入学
大正八年七月	同　卒業
大正八年九月	東山中学校講師嘱託となる
大正九年九月	京都帝国大学大学院入学
大正十年三月	東山中学校講師を解嘱
大正十一年二月	松江高等学校講師嘱託となる
大正十一年五月	松江高等学校教授となる
大正十一年九月	京都帝国大学大学院退学
大正十四年四月	第三高等学校講師となる
昭和二年三月	第三高等学校教授となる

昭和二十四年八月　京都大学教授となる（吉田分校勤務）
昭和二十九年四月　京都大学大学院文学研究科の講義を担当する
昭和三十三年十月　京都大学教授を退官
昭和三十三年十月　京都大学名誉教授の称号を受ける
昭和三十三年十月　南山大学教授となる
昭和四十一年三月　同　退職
昭和四十一年四月　大手前女子大学教授となる
昭和四十一年八月二十一日　死亡
昭和四十一年八月二十一日　勲三等瑞宝章を受ける
昭和四十一年八月二十一日　従三位に叙せられる

著書目録

著書

1　*Essays by Herbert Read*（研究社　現代英文学叢書）（序文と註解）　研究社　昭和一〇年
2　「ティ・エス・エリオット」（研究社　英米文学評伝叢書）　研究社　昭和一二年
3　「現代英文学の課題」（弘文堂　教養文庫）　弘文堂　昭和一四年
4　ドーソン「政治の彼方に」（訳と解説）　筑摩書房　昭和一六年

5 ドーソン「宗教と近代国家」（訳） 弘文堂 昭和二一年
6 バジョット「英国の国家構造」（訳） 弘文堂 昭和二二年
7 「エリオットの芸術論」 比叡書房 昭和二四年
8 「人はみな草のごとく」（随筆集） 養徳社 昭和二四年
9 マリ「自由社会」第一部（訳） 世界文学社 昭和二四年
10 「現代の英文学」（弘文堂 アテネ文庫） 弘文堂 昭和二六年
11 ウォーコップ「ものの考え方」（訳） 弘文堂 昭和二六年
12 エリオット「文化とはなにか」（訳） 弘文堂 昭和二六年
13 トインビー「試煉に立つ文明」（訳） 社会思想研究会出版部 昭和二七年
14 マリ「自由社会」第一部、第二部（訳） 社会思想研究会出版部 昭和二八年
15 「エリオットの詩学」（創元文庫 (7)の改版） 創元社 昭和二八年
16 ウェイドレ「芸術の運命」（訳） 創文社 昭和二八年
17 「共通感覚」（筑摩書房 現代日本評論選） 筑摩書房 昭和二九年
18 「エリオット」（鑑賞世界名詩選）（三〇年度読売文学賞） 筑摩書房 昭和二九年
19 ルーイス「現代詩論」（訳） 創文社 昭和三〇年
20 ルーイス「詩をよむ若き人々のために」（訳） 筑摩書房 昭和三〇年
21 「オーデン詩集」（訳と解説） 筑摩書房 昭和三〇年
22 「エリオット研究」（編著） 英宝社 昭和三〇年
23 「英国の詩論」（編著） 山口書店 昭和三一年
24 アイザックス「現代英詩の背景」（共訳） 創文社 昭和三一年

25 スペンダー「夢を孕む単独者」（共訳）　筑摩書房　昭和三一年
26 「批評の建設のために」（編著）　南雲堂　昭和三一年
27 「英詩鑑賞」（京大英語講座）（編著）　創元社　昭和三一年
28 「西洋の詩を読む人に」（ポエム・ライブラリイ）（編著）　創元社　昭和三一年
29 「エリオットの詩学」（角川文庫 (15) の改版）　角川書店　昭和三二年
30 スペンダー「夢・絶望・正統」（共訳）　筑摩書房　昭和三二年
31 「日本の沙漠のなかに」（随筆集）　筑摩書房　昭和三二年
32 ウィレー「十七世紀の思想的風土」（共訳）　創文社　昭和三三年
33 評論（現代日本文学全集　第九六巻、現代文芸評論集(三)）　筑摩書房　昭和三三年
34 「童心集」（随筆集）　中外書房　昭和三三年
35 トインビー「一歴史家の宗教観」（訳）　社会思想研究会出版部　昭和三四年
36 ホルロイド「混沌から」（共訳）　筑摩書房　昭和三六年
37 ドーソン「革命の世界史」（訳）　筑摩書房　昭和三八年
38 ハード「堕落論」（共訳）　筑摩書房　昭和四〇年